ゆうあい報
おだぴたる
特定医療法人
祐愛会織田病院 ODA REGIONAL MEDICAL CENTER
発行者　祐愛会織田病院企画室
責任者　織田　正道
＜院内報＞

理想の地域包括ケアシステムの構築をめざして

～「ゆうあいビレッジ」が完成～

特定医療法人 祐愛会理事長
織田 正道

超高齢社会が現実のものとなり、さらに進展している現在、地域の皆さんが住み慣れた場所で、その人らしく老い、安心して生活を続けていかれるためには、医療の充実と共に、可能な限り自立した生活が営めるように、保健、医療、介護、さらには生活支援、住宅などの枠組みを超えた総合的で一体的なサービス提供が重要です。私どもは、豊かな長寿社会のモデル作りをめざし「ゆうあいビレッジ」の構想を立ち上げ、これまで具現化に努めてきました。そしてその方向性は『地域包括ケア』の考え方に沿ったものと言えます。

（一）総面積八〇〇〇坪の「ゆうあいビレッジ」が完成

平成九年に、病院から在宅に向けての復帰支援機能を持つ介護老人保健施設「ケアコートゆうあい」が開設しました。その後、当法人は一四年もの歳月をかけ、総面積八〇〇〇坪の敷地内に、二十四時間体制でのサポート機能を持つ総合ケアセンターはじめ、施設系サービス（介護老人保健施設、ショートステイ）、居住系（グループホーム、特定施設）、通所系（デイケア、一般デイサービス、認知症デイサービス、介護予防フィットネス、小規模多機能ホーム）、訪問系（居宅介護支援事業所、訪問看護ステーション、ヘルパーステーション）など、あらゆる機能を集合した「ゆうあいビレッジ」を建設してきました（写真）。そして、さる七月三日に多くの市民の皆さんに祝っていただき晴れて完成式を行いました。「ゆうあいビレッジ」は病院から車で五分、バイパス沿いであるため住宅街や周辺地区からのアクセスもよく、地域包括ケアの拠点にはもってこいの場所です。

（二）「ゆうあいビレッジ」のコンセプト

この『ゆうあいビレッジ』のコンセプトは、公園の中に施設や住宅群があり、四季を感じさせる生活環境の中に、お年寄りが豊かな「クオリティー・オブ・ライフ」を楽しめ、やすらぎを持てるような空間をイメージしています。また、施設群は文化を感じさせる北欧風のデザインでテラス・庭などが美しく調和し、散歩道を歩けば庭園の樹木や草花に四季の豊かさを感じさせ、人々の息づかいが感じられる安心感のある環境を構成しています。この様な生活環境がお年よりにも、ゆとりの感性、感情をよみがえらせてくれるものと思います。さらに、すべての施設や住宅はユニバーサルデザインを採用し、利用される方々の使い勝手に配慮した仕上がりになっています。

また、「ゆうあいビレッジ」の敷地以外にも、山浦、谷所、さくら通りの各地区に同様のデザインを採用したデイサービスを開設し、利用者の状態に合わせたサービスを選ぶことが可能となっています。

（三）地域包括的ケア実践のための人材育成

「ゆうあいビレッジ」が完成し、保健、医療、介護分野を包括的にサービス可能とするすべての体制がほぼ整いました。しかし、これ等の分野が有機的に結びつき、継続的で一貫性のあるサービスとして提供可能となるのは、お互いの役割を理解し尊重した分野・職種を超えたチームアプローチが重要であることは言うまでもありません。殊に医療と介護は異なる制度の中でサービス提供を行ってきましたので、アセスメントひとつ取っても視点の相違があり、情報の一元化・共有化すら難しい面があります。今後、分野間の壁を如何に取り除くかが大きなテーマであり、医療と介護を複合的に担う役割ができる人材の育成が急務です。特に医療スタッフの介護分野への理解が急がれます。今後、異なる分野を計画的にローテーションし、現場でのOJTを通じ、人材を育成していきたいと思います。

今後も私どもの法人は、長寿社会における『地域包括ケアシステム』のモデルとして全国に発信できるよう、皆さんと共に新たな夢と希望を持って、前進していきたいと思います。

地域包括ケアシステム

ゆうあいビレッジの完成と今後について

ケアコートゆうあい施設長
千々岩 親幸

来るべき超高齢化社会に向けて厚生労働省は研究会を作り、そこで地域包括ケアというシステムを打ち出しました。その報告では七五歳以上の人口が現在の二倍に増大する二〇二五年までにこのシステムが実現されていることを提案しています。

地域包括ケアシステムにおける介護サービス提供体制では「地域住民は住居の種別（従来の施設、老人ホーム、高齢者住宅、自宅）にかかわらず、おおむね三〇分以内（日常生活圏域）に生活上の安全・安心・健康を確保するための多様なサービスを二四時間三六五日通じて利用しながら、病院等に依存せずに住み慣れた地域での生活を継続することが可能になっている。」とあります。このようなサービス体制を構築するために高齢者ケアの原則として、住み慣れた地域や住居での生活の継続、本人の選択、自己能力の活用の三点を提言しました。そしてサービス提供に当っては、「在宅サービス」が優先であって施設サービスは補完的なものであり、多数の職員を抱えるような従来型の施設とは異なり、軽装備の多様な住宅を前提として、地域の医療や介護などの様々なサービスを利用者の状態にあわせて組み合わせることにより、二四時間三六五日体制のケアシステムを地域単位で実現するとしています。

このため今後は八〇人～一〇〇人が入所するような大規模な施設は作られず多くとも二〇人程度の高齢者が利用するような施設や住居が作られることとなります。例えば都市部では空き家など既存資源活用による小規模な拠点の整備を進め、人口減少地域では既存施設の転用や政策的集住を誘導するなどの地域の実情に応じた整備を行うこととなっています。

ここで言う「在宅」とは現役時代から住んでいる自宅に限定されるものでなく、介護が必要になっても住み続けることができる集合住宅などに住み替えることも含んだ広義の概念であり、「住み慣れた地域」についても、現役世代に住んでいた地域や住居に固執した概念ではなく、本人が住み続けたいと考える地域を本人が選択するという広い意味なのです。

震災の影響で改革のスピードはやや遅くなった感がありますが、方向性は変わることはないと思われます。今後大規模な施設であるケアコートゆうあいのような老人保健施設は以前よりもさらにリハビリを重点的に行う施設へと変わり、自宅で介護が困難になられた方は地域包括ケアシステムにおける「在宅」へと住み替えが促進されるようになります。

私どもゆうあいビレッジもこのような考え方に基づいて各地域にデイサービス施設、ビレッジ内に小規模多機能施設、今月オープンの特定施設「レジデンスゆうあい三丁目」を建設いたしました。ゆうあいビレッジ構想では今後も前述したようなシステムの構築をいっそう充実させていく予定となっております。

ゆうあいビレッジ 案内板

レジデンスゆうあい３丁目

64型MDCTの導入について

放射線科主任　坂田　善和

当院では、八月より従来の4列マルチスライスCTに代わり、64列マルチスライスCTが稼動することになりました。64列マルチスライスCTとは、数多くあるCT機種の中でも上級機にあたり、大学病院、地域の基幹病院、循環器を専門とする医療機関等にしか設置されておらず、その設置状況は全国でもまだ三割程度です。佐賀県内においても、まだ数施設にしか設置されてなく、その期待は非常に大きなものとなっています。

64列マルチスライスCT

では、この64列マルチスライスCTは今までのCTとどこが違うのでしょうか？

大きな特徴は、①大幅な撮影時間の短縮ができる、②非常に細かい間隔（0.625mmスライス）での撮影ができる、③一度に広範囲の撮影ができる、です。この64という数字は検出器の数を表しています。検出器とは患者の体を透過してきたX線を電気信号に変えて画像化する装置ですが、この検出器の数が多いほど一回転あたりの画像にできる範囲が広くなります。その結果、撮影時間も短くなります。例えば、腹部の撮影では従来三十秒ほどの息止めが必要でしたが、十秒前後で行えるようになります。撮影時間が短くなれば、患者様の負担も大幅に軽減でき、さらに検査時間も短くなりスループット（単位時間あたりの処理能力）が向上します。また、検出器の幅をさらに細かくすることでより詳細な画像を得ることができます。そのほかハードの面でも患者様に非常に優しい設計となっています。

また、これらの特徴を最大限に生かした今までは実現できなかった新しい撮影ができるようになりました。それが冠動脈CTです。従来CT検査は画像を作る上で、動きに弱かったのですが、X線管をより高速で回転させることで、動きのある心臓（冠動脈）を撮影することが可能となりました。従来、狭心症や心筋梗塞の原因となる冠動脈を診るためには心臓カテーテル検査が必要でした。もちろん今でも心臓カテーテル検査は狭心症の診断において最も確実な方法でありますが、心臓カテーテル検査は通常は入院が必要です。それに比べ64列マルチスライスCT検査は外来での検査が可能で、かつ侵襲が少ないため、狭心症診断に大きな期待が寄せられています。

最後に、まだスタートしたばかりのこの64列CTですが、従来の装置よりはるかに進歩した性能を、十分診療に活かせるようにしていくことがこれからの課題であります。院内に限らず、地域の先生方にも積極的に活用していただけるよう広報をしっかり行って行きたいと思っています。

ハワイ大学医学部二年生　当院で臨床実習

皮膚科部長　織田　洋子
SE　宇佐美　大
医局秘書　田中　優子

佐賀大学医学部とハワイ大学医学部の国際交流事業（JABSON—Saga exchange program 2011）が今年も六月二十日～七月一日まで、佐賀大学医学部を中心に行われました。

当院にも四名の学生が六月三十日に来院され院内とゆうあいビレッジで臨床実習を行いました。

二〇〇一年よりこのプログラムに参加し十一年目を向かえました。今回医局秘書の田中さん、SEの宇佐美さんを中心に当法人の歴史、組織図、プロモーションビデオの英語版を作成し、よりスムーズに実習をすすめることができました。

下記の写真は実習終了後浴衣に着替えて祐徳稲荷神社に参拝に出かける光景です。

日本三大稲荷である祐徳稲荷神社では、歴史や日本伝統を学ぶことができました。また織田家に伝わる古医書資料室を見学したり、築三〇〇年の茶室では、お茶を自らたてるなど日本文化の一端を経験していただきました。

地域の文化的背景を経験することは地域医療を理解する上で重要なことです。この交流をさらに充実し、ハワイ学生にとって貴重で有意義な時間になるように努めて参りたいと思います。

ハワイ大学医学部学生（左からの4人）と祐徳稲荷神社参拝へ

被災地訪問

ＪＭＡＴ（日本医師会災害医療チーム）気仙沼支援報告

リスクマネジャー　井手　眞由美

気仙沼の風景

写真右２番目：織田理事長
写真右：井手 RM
写真左：小柳看護師

四月五日から九日まで、佐賀県医師会ＪＭＡＴとして、織田病院から織田理事長、山口部長、小柳看護師、そして私の四名が派遣され、気仙沼巡回療養支援隊（ＪＲＳ）の応援を行いました。実質三日間のおもな業務は、褥瘡処置など在宅訪問でした。

津波の被害のない高台の地域は、エアーマットやギャッジベッドが停電で動かず、重度の褥瘡を発生している患者が続出していました。三ヶ月経って、褥瘡は褥瘡分類二度～一度まで改善していました。処置としては創の洗浄・軟膏処置後デュオアクティブやハイドロサイト貼用が主でした。

褥瘡のほかに、廃用症候群や拘縮など二次的障害も発生していました。地域のデイサービスや訪問診療の再開を待つ家族の声も多く聞かれましたが、地域の復興が難しく、準備ができていないのが現状です。今後、リハスタッフの被災地での活動も重要と感じました。

道路が寸断され最も支援が遅れていた地区では、海が近づくにつれ津波被害は大きくなっていくようで、多くの倒壊と火災に見舞われた家が見受けられました。がれきのほこりやコンビナート火災の影響で、鼻アレルギーや咽喉頭炎の人が多く、理事長による的確な診断で市立病院へ紹介すると大変喜ばれました。

避難所では、二ヶ月近く服薬していない人がいました。血糖は２１０と非常に高く、近くの開業している医院の情報がなく放置されていたようです。

ＪＲＳによれば、現在巡回訪問からかかりつけ医による診療へ返す〝移行期〟に来ているということで、地域の診療やサービスを利用できる可能性をさぐる役割が求められていました。私たちは、訪問した情報をミーティングで流し、利用可能な診療所について、翌日被災者へ伝えました。

ミーティングは、医師・保健師・栄養士・行政・看護師など多職種が参加し、一例ずつかなり専門的なディスカッションが行われていました。コーディネーターのＪＲＳセンターの医師・看護師が、情報をそれぞれの医療ニーズに対し、メンバーへうまく連携を図っているため、検討が活発に行えていると感じました。院内のカンファレンスでもコーディネーターの役割をとるリーダーの重要性を感じました。

最後に、今回の支援に参加し地域や病院の枠を超えて同じ思いで活動する面白さを感じ、機会があればぜひ他の方にも参加していただき経験してほしいと感じました。

新入職員フォローアップ研修会を実施して

健康管理センター課長　土井　弥生

当院では五年前より、入職後三ヶ月目に新入職員フォローアップ研修を実施しています。今回は七月四日に行いましたが、勤務終了後にも関わらず二十六名（八〇％）の方に参加者して頂きました。

この時期は、自己中心的な行動も寛大に許されていた学生時代と異なり、社会人となって初めて人間関係や仕事の難しさ、考え方の多様さへの戸惑いなど多くの課題が一度にのしかかって来る時期と言われています。「ストレスを感じたら」と題して、

①自分と向き合う
②自分を見つめなおす
③頑張らない
④上司・同僚に相談する
⑤同僚が気づいてあげる
⑥職場以外の相談窓口

などについて話をさせていただきました。

その後、六つのグループに分け、自分たちの仕事の内容やストレスを感じたらどうしているのかを一〇分程度話しあってもらいました。各々が近況だったり、職場の現状など活発な意見が出ていました。講義のときとは違いみなさんの笑顔が非常にきれいでした。

ストレスは「心のかぜ」とも言われます。変だな？と思ったときはいつでも相談に来てください。お待ちしております。

（PHS　724　下田）
（PHS　781　土井）

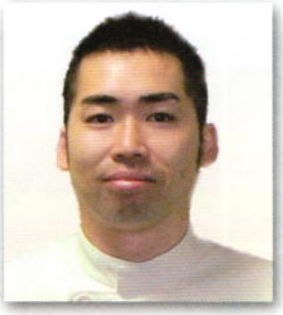
研修風景

研修風景

新任Dr紹介

内科医師　安部 友範

〔出身大学〕佐賀大学医学部
〔出身医局〕佐賀大学医学部呼吸器内科
〔専門領域〕呼吸器内科



本年六月より呼吸器内科として勤務しております安部友範です。佐賀大学医学部を卒業後、佐賀大学での初期研修プログラム（一年目佐賀県立病院好生館、二年目佐賀大学附属病院）を終了した後に、佐賀大学附属病院呼吸器内科に入局いたしました。呼吸器内科として佐賀大学で二年間勤務しており、現在医者になって五年目となります。

六月より呼吸器内科として織田病院で勤務することになりましたが、呼吸器内科医としては経歴も浅く、どのくらい織田病院や鹿島地域の患者さまに貢献できるか分かりませんが、私ができることは精一杯がんばっていきたいと思っております。また、医師としても至らない点も多々あるとは思いますが、多くの先生方の御指導を受けながら、日々精進していきたいと考えております。

まだまだ不慣れなところも多く、ご迷惑をおかけするとは思いますが、患者さまの心身ともにみられる医者を目指してがんばっていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

外科医師　山地 康大郎

〔出身大学〕佐賀大学医学部
〔出身医局〕佐賀大学医学部
〔専門領域〕一般・消化器外科

外科の山地です。今年四月から織田病院に勤務しています。前任の奥山先生と交代で来ました。医師六年目になります。

新任Dr紹介の依頼があり、参考文献としてもらった昨年の奥山先生のDr紹介を読み返していたところ、「私が外科を志したのは、純粋に手術をしたいという思いがあるからです」という一文がありました。

とても立派なことで、外科医として最も大切な気持ちであるなあと感心しました。私が外科医になった時のことを思い返すと、私には彼のような純粋な気持ちがあったわけではなく、どちらかというと手術をしなくてよければ、したくないなあと思っていて、実はそれは今も変わっていないかもしれません。

ただ、外科医になっていろいろな患者さんに出会い、病気の治療に関わってきましたが、その中には手術をしなければ助からない人がいて、それが可能なのは外科医なのだということを少しだけ実感することもある今日この頃です。

患者さんが良くなることを第一に考え、それに手術が必要ならば、自分ができる限りの力を尽くしたいという思いで診療をしています。まだまだ至らぬところもありますがよろしくお願いします。

close up（クローズアップ）

今年4月に3階病棟師長に赴任され、笑顔を絶やさず患者さまに接しておられ、またスタッフとともに生き生きと業務に当られている辻田師長にお話を伺いました。

3階病棟　辻田幸子　看護師長

Q. 今までの経歴をお聞かせ下さい。

S54年に看護師になってからは国立病院機構で32年間、東は東佐賀病院から西は川棚医療センターまでいろいろな病院で働かせて頂きました。最後の病院では医療安全に4年間携わりとても勉強になりました。

Q. 織田病院の印象を聞かせて下さい。

職場（ハード面）がきれいで花もさりげなく飾ってあり、療養の場に配慮が行き届いた病院と思いました。スタッフも若くて活気がある職場と感じました。

Q. 最後に今後の抱負をお聞かせ下さい。

今まで培ってきたことをみんなに伝えて、少しでも質の高い看護が提供できればと思っています。

「平成二十三年度 新人歓迎会」

医局秘書　平川　みき
中元寺　美咲

平成二十三年五月十四日、ハウステンボスにて織田病院恒例の新人歓迎会が総勢二六四名の参加のもと行われました。今年も病院十五名、ケアコート十五名の新人の方々を迎え、また普段はなかなか会うことの少ない職員同士の親睦も深めることができました。

新人の方々のあいさつ

司会

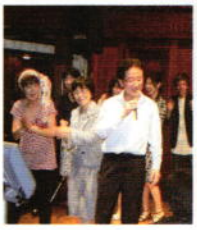
今回、私たちは司会を勤めさせて頂きました。司会の定位置に立つと緊張感が高まりましたが、笑顔で手を振ってくださる職員の方々を見ると、ほっとしました。そして理事長先生の挨拶で歓迎会がスタートしました。会場には味もさることながら見た目にも鮮やかな料理が所狭しと並べられ、しばし職員同士の楽しい時間が流れました。

歓迎会も中盤に差し掛かり、いよいよ新人の方々のあいさつが始まります。はつらつとした挨拶に会場は暖かい大きな拍手に包まれました。また、西山院長が各テーブルを回られながら写真を撮影されており、和やかな雰囲気と笑顔が溢れていました。

最後は千々岩施設長の万歳三唱で一次会が締めくくられました。そしてほろ酔い気分のまま二次会会場へ向かいました。そこでは新人さんの余興やスタッフ、先生方の歌声を聞くことができ、大いに盛り上がりました。楽しい時間もつかの間、万歳三唱で今回の新人歓迎会は幕を閉じました。その後宿泊の方は、自然に囲まれたフォレストヴィラコテージでゆっくりと過ごされたようです。今回司会をする上で、多くのスタッフに協力してもらい最後には皆さんの暖かい拍手を頂くことができました。ご協力ありがとうございました。来年もまた病院、ケアコートのスタッフが集まれる日を楽しみに日々の仕事を頑張っていきましょう。

会食風景

新人の方々？！



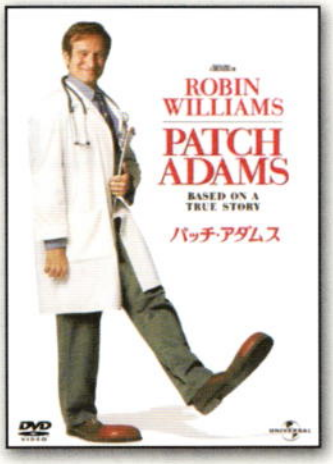
カラオケ！

夜のサニー号

万歳三唱

DVDライブラリー

パッチ・アダムス
PATCH ADAMS



©1998

今回紹介するのは、臨床の現場にて「笑い」を重んじる実在する医師の話です。

主人公のパッチ（ハンターアダムス）は、自殺癖を理由に精神病院に入院します。そこで彼は「笑い」によってルームメイトのルディと打ち解けたことを機に、「笑い」は人を癒し、また人を癒すことで自分もまた癒されていることに気づきます。それから人を助けることを志し、医学生になった彼は、真っ赤な鼻をつけたピエロに扮し、多くの子供や老人を「笑い」によって癒し、彼らの生の質を高めていきます。そうした彼の行動や言動に、周りの人々は救われ、大事なことに気づかされていきます。

とくに、「医療行為とは？」という問いに対するパッチの考えには心を揺さぶられるものがあり、医療に携わるものとして今の自分に足りないもの、勘違いしてはいけないもの、忘れてはならないものを考えるきっかけとなりました。そして何より、患者さんは病気をもった患者である前に、悩みや不安を抱えるひとりの人間であるということを改めて認識させられました。

また、アダムス氏の意志に共鳴した人々により、ホスピタルクラウン（臨床道化師）としての活動が世界各地で行われており、今年6月にも東北の被災地に「笑い」を届ける活動が行われました。これを機に日本でも、ホスピタルクラウンの認知と活動がもっと広がることを願います。

（薬剤部　緒方　良彦）

ゆうあいだより

ゆうあいふれあいフェア

～法人全スタッフのチームワークの結晶です～

ゆうあいビレッジ副施設長　諸岡　義彦

旭ヶ丘保育園の園児さん

不知火太鼓

鹿島高校ブラスバンド部のみなさん

ゆうあい一座 with フラダンス

七月三日（日）ゆうあいビレッジの完成を記念して「ゆうあいふれあいフェア」が開催されました。心配されていた天候も、曇り空ではありましたが、雨が降ることもなくまた暑すぎもせず絶好のコンディションでした。

十時からの「ゆうあいビレッジ完成の集い」に続いて十時三十分から始まったフェアは、さがにわか選手権グランプリのゆうあい一座 with フラダンスでスタートしました。続いて迫力満点の不知火太鼓、かわいいダンスを披露してくれた旭ヶ丘保育園の園児さん、暑い中でも爽やかに演奏してくれた総勢三十八名からなる鹿島高校ブラスバンド部と続き、ステージは大いに盛り上がりました。

ビレッジ内の施設六ヵ所をまわるスタンプラリーは予想を遥かに超える参加者で二〇〇個用意していた景品はあっという間に無くなりました。小規模ホームではアイスコーヒーやジュースを飲みながらゆっくりと会話を楽しんでいる方が大勢おられました。またその他にもバルーンアート、ヨーヨー釣り、綿菓子、ジュース、風船の各テントも子どもから大人まで多くの人で賑わっていました。

今回は「ゆうあいビレッジ完成の集い」の式典と「ふれあいフェア」の同時開催ということで、法人単独イベントとして最大規模になることが予測されたので、全体統括としての事務局、受付係、会場・駐車場係、見学案内係、集客企画係と責任者を決め、運営を組織的に行いました。役割を明確に、毎週の企画実行委員会でそれぞれの担当の進行状況や問題の確認を行いました。人が集まるイベントにするためには、また、気持ちよく楽しんでもらうためには、更に事故など無いよう安全に運営するためには、などなど検討を繰り返すうちに数々のアイデアが出てきました。そうしてそれらのアイデアを実行することで、参加された一〇〇〇名近い方々から「祐愛会職員の人たちの対応、接客はすばらしかった」とお褒めの言葉を数多くいただきました。改めて私たち法人の組織力とチームワークを強く感じました。

暑い中でも笑顔で一生懸命手を振って誘導してくれた駐車場スタッフ、そしてどこへ行っても気持ち良く対応してくれたスタッフ、約七〇〇件の自宅の訪問と主要施設にチラシを配ってくれたスタッフ、スタッフの送迎をしてくれたスタッフ、見学者として家族同伴で協力してくれたスタッフの方々など、まだまだ沢山ありますが、皆様本当にありがとうございました。

多くの人で賑わう綿菓子のテント

リハビリ体験

賑わう会場

ゆうあいふれあいフェア ご来場のみなさま

スタンプラリー交換所

施設六ヵ所をまわるスタンプラリー

ふるさと探訪
『伊万里』

伊万里と言えば、伊万里焼、伊万里牛が有名ですが、森永製菓創始者である森永太一郎の生誕地でもあります。

伊万里神社

森永太一郎の銅像

伊万里神社境内略図

森永太一郎翁胸像
建立之地

森永太一郎の銅像

森永公園のエンゼル

森永太一郎は、一八六五年（慶応元年）六月一日に伊万里に生まれました。一八九九年に森永製菓の前身となる「森永西洋菓子製造所」を東京赤坂に設立。エンゼルマークは太一郎の「子供に喜びを」という願いから生まれたものです。森永キャラメルのエンゼルは「TM」のローマ字と共に描かれています。このTMは森永太一郎のイニシャルです。

森永太一郎の銅像が伊万里市内に二ヶ所あります。一つは伊万里神社の境内にあり、神社の高台から伊万里市内を見守っています。さらに、神社の境内には、御菓子の神様を祭った中嶋神社があります。伊万里神社の宮司は〝加志田〟さんという、御菓子に縁のあるお名前です。二つ目は森永の乳製品工場跡地に作られた森永公園です。大正11年に工場が新設され、近隣の酪農家から牛乳を集め製菓原料用の練乳を製造していました。平成十五年に公園は完成し、公園の時計には森永製菓のシンボルであるエンゼルがあり、エンゼル公園とも呼ばれています。

鹿島～伊万里へは四十五分位で到着します。焼物とはまた違った視点で伊万里を散策してみてはどうでしょうか。

（MSW　原　和行）

ブックエンド

【新着図書】

・村瀬孝生著「おばあちゃんが、ぼけた。」理論社、二〇〇七

まず、本書のタイトルの斬新さとかわいいイラストに惹かれました。

著者は宅老所の所長をされている方です。特別養護老人ホームと宅老所を利用されている約二十人の方の周りで起こる出来事を四コマ漫画を交え紹介し、その中で感じたことやたくさんの大切なことを記しています。

例えば、「ジョーズばあさん、探しものは何ですか？」という章があります。何故ジョーズかというと、この方は物盗られ妄想の持ち主で、物を盗られたと言って執念深く追いかけてくる様子から名付けられました（もちろん映画の〝ジョーズ〟から採られています）。一緒に服を見ながら探すのですが、なかなか盗られたものと言ってくれない。十数分経ち、最初に見せたもの出したら「ああ、これこれ」と納得。最初から無くなってもいないものを探すことは容易ではありませんが、認知症の方とのほのぼのとした関わり方が感じられるエピソードです。

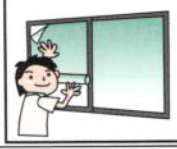
本書は、いろいろな出来事とその解決法を通して、認知症を持つ方々やその介護について考えさせてくれる一冊です。

（ケアコート事務部　一ノ瀬　綾子）

・春日武彦著「臨床の詩学」医学書院　二〇一一

編集後記

去年ほどの猛暑日の可能性は低いと予想された今年の夏も、まだまだ連日暑さを感じます。先日のサッカー女子ワールドカップでは、なでしこJapanが優勝し、日本を勇気づける勝利と称賛されました。

この夏、ゆうあいでは「レジデンスゆうあい三丁目」が完成しました。また、織田病院では64列マルチスライスCTが導入され、ますます医療・介護分野での期待が見込まれます。東北地方太平洋沖地震から四ヵ月が経ち、井手看護師長の報告にもありますように織田病院からも支援活動に参加されました。まだまだ被災地では復興作業が必要で、日本中・世界中で、今自分たちにできる事は何か？と誰もが感じている事だと思います。法人全体でも、エアコンの温度設定を徹底し節電に努めていますが、節電に限らず、今、自分にできる事は何か？　すべき事は何か？と日々の業務で意識して行きたいと思います。皆さん、暑さに負けず日々のお仕事をがんばって行きましょう。

（健康管理センター　香田　真知子）